

外国人日本語教師研修における諸問題

-カンボジア人研修生を担当して-

天理教語学院 日本語教育センター主任 大内泰夫

はじめに

来日して日本語を一年間学習し、帰国後、日本語教師として教壇に立つ留学生を紹介され、その研修を受け持つことになった。日本人対象の日本語教育研修は担当したことがあるが、筆者が勤務するところでは初めてのケースで受け入れるべきかどうか悩んだ。しかし、帰国後、活躍できる人材としてできるかぎりのことを支援しようと受け入れが決まり研修を開始した。今後も外国人日本語教員の育成は日本語教育の世界でも大きな課題として実践報告や更なる研究が進めていかなければならない分野だと思うが、諸問題や反省点なども含め一つの実践例としてまとめた。

研修を始めるにあたり

今回筆者が受け持った研修生は筆者が勤める日本語教育機関の日本語科で一年間、勉強してきた学生2名である。卒業前の面接で、帰国後カンボジアの日本語学校で教壇に立つということで、研修生として受け入れてくれないかとその日本語学校の校長から依頼があった。しかし、外国人日本語教師の育成というのは経験もなく、日本人研修生と同じようにできるのか当初から疑問であった。その日本語学校は主に中・高校生が日本語を学んでいるところで、彼らもそこで学んでいた。日本へ来る前には少し後輩たちにも教えたことがあるとのことだった。そこでコース開始まで、面接を数回行い、研修内容を考えていくことにした。研修期間は4月から7月中旬までの約4か月間しか取れないとのことであった。また、数回の面接の中で同じカンボジアの日本語学校で勤めたいと希望する大学新卒の日本人研修生も受け入れてくれないかとの依頼もあり、どうすべきか悩んだが、ヴィゴツキーの唱える学習理論に基づき「協同学習の中で相互行為を通して更に深い学習ができるのではないか」、また「協同で学習を進める中で問題解決能力も養えるのではないか」との考えから受け入れることにした。日本人研修生と一緒に勉強していくことでお互いに違った視点から意見を出し合えるのでメリットもあるのではないかと考え、カンボジア人研修生2名、日本人研修生1名の3名で開始することになった。

受講生について

S君・N君

国籍：カンボジア

年齢：20歳

日本語学習歴：カンボジアで2年、来日後、筆者の勤務する学校で1年

日本語能力：日本語能力試験 N2合格 研修開始時はN1合格目指し独学で勉強中

会話力もあり、日本語科では一番進度の速いクラスに所属していた。

漢字学習も好きで常用漢字程度は十分に読み書きできる。

A君

国籍：日本

年齢：23歳

日本語教育研修歴：なし

外国語能力：大学で中国語を専攻

研修内容

期間：2012年4月8日～7月13日（約4か月）月～金の午前中3時間

研修総時間数：170時間

使用教材：「みんなの日本語Ⅰ」スリーエーネットワーク

「みんなの日本語 初級 教え方の手引き」スリーエーネットワーク

「みんなの日本語 初級 絵教材」スリーエーネットワーク

「みんなの日本語 初級Ⅰ 翻訳・文法解説」スリーエーネットワーク

「日本語の教え方の秘訣 上・下」スリーエーネットワーク

「初級を教える」国際交流基金 日本語教授法シリーズ9

時間割

		月	火	水	木	金
1	9:00~9:50	「初級を教える」を使つての授業	「みんなの日本語」の各課の解説、 教案作成、模擬授業、振り返りなど			
2	10:00~10:50					
3	11:00~11:50					

約4か月という限られた時間の中で何ができるのか、また彼らは現地へ帰ってからすぐに「みんなの日本語（スリーエーネットワーク）」を使い、教壇に立たなければならないということから、日本語教育の基礎的なことや学習理論など、時間をかけてじっくりやっていくことはできない。日本人教師研修であれば大学の副専攻や日本語教師養成 420 時間相当の授業など具体的なことも考えられるが、彼らの現実的なニーズを考慮すると、実践的なことをやりながら、理論的なことも指導していくのがベストかと考え、月曜日は「初級を教える」国際交流基金の日本語教授法シリーズ9を使い授業をすることにした。この本は国際交流基金日本語国際センターで海外の日本語教師のために作られた教材であり、総ルビで外国人研修生にも使いやすい。また基礎的な知識を紹介するだけでなく、考える力を養うように編集されていて、質問や課題を研修生、教師が共に考えながら進めていくことが出来る。

火曜日から金曜日は「みんなの日本語」の一課から「解説」、「教案準備」、「模擬授業」、「振り返り」という実習形式で授業を行った。「解説」ではその課で出て来る新出語彙を「みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説」を使い、その課で扱う語彙の確認をした。その後、「教え方の手引き」を使い、新出の文型を教えるポイントなどを解説し、あわせて筆者の教案も参考にして、ポイントとなることを解説した。「教案作成」では実際に教案を書いてもらい、午後も自習として教案作成をしてもらった。「模擬授業」では作成した教案をもとに一人の研修生が授業を行い、他の研修生と教師は学生役になり、その授業を受けた。「振り返り」ではまず、模擬授業を行った研修生に何がうまくいったか、うまくいかなかったかなどの感想を述べてもらい、その後、他の研修生や教師が意見を述べるという形式をとった。そしてその授業の中で「初級の授業の流れ」「教授法の歴史や教授法の紹介」「学習者中心の授業」「教案の書き方」「正確さと流暢さ」などについても述べた。

カンボジア人研修生は実際に筆者の勤める学校で授業を受けてきたので、実際の日本語教室の見学は

行わなかったが、日本人研修生には日本語科で実際の日本語授業見学もしてもらった。

教案作成について

各課での新出語彙や文型などの項目を解説し、実際に教案を書いてもらうが、初めての場合、何をどこまで書けばいいのか、またどのような流れで書けばいいのかわからない。これは外国人の研修生に限ったことではないが、各課の解説を一通りしても、なんとなくわかったというレベルで実際に書き始めると考え込んで時間ばかりが過ぎてしまう。そんなこともあり、筆者が作った教案のテンプレートを配り、そこに書いていってもらうことにした。

教授項目一覧テンプレート

This template is for listing lesson items. It includes a header for the lesson number (第__課). The main body is divided into several sections with checkboxes for each item: 文型 (Sentence Patterns) with a list of 1-6; 名詞 (Nouns); 動詞 (Verbs); 形容詞 (Adjectives); 新詞・補綴詞 (New Words/Affixes); and その他 (Others). Each section has a large rectangular box for notes.

新出語彙用テンプレート

This template is for new vocabulary. It features a header for the lesson number (第__課) and a list of 10 items. Each item has a small box for the word, a line for the reading (読み), and a line for the meaning (意味).

新出文型用テンプレート

This template is for new sentence patterns. It includes a header for the lesson number (第__課) and a large box for the pattern. Below this, there are sections for 導入 (Introduction) with a list of 1-3 items, リビート (Repeat) with a list of 1-10 items, and Q&A (Questions and Answers) with a list of 1-4 items. There is also a section for ゲーム・カルタ活動など (Games/Flashcard Activities etc.) with a large box.

練習 B・C 会話用テンプレート

This template is for conversation practice. It includes a header for the lesson number (第__課) and a section for 練習 B (Practice B) with a list of 1-10 items. Below this, there is a section for 練習 C (Practice C) with a list of 1-10 items. There is also a section for ビデオ (Video) with a list of 1-4 items and a section for CD (CD) with a list of 1-4 items.

「教授項目一覧」ではその課で教える語彙や文型をリストアップして、項目ごとにまとめてもらい、それから個々の語彙や文型を書き始めてもらった。

新出の語彙に関しては「新出語用テンプレート」を使い、絵カードを使う場合は絵カードの番号なども書いてもらい、その語に関する例文をいくつか考えて書いてもらうようにした。

動詞の場合、動詞のグループ、その課までに出てきた活用形、名詞と助詞を組み合わせた例文などをいくつか考えてもらい書くように指導した。形容詞も同じく、活用や例文を考え、書き込むように指導した。

新出の文型に関しては「新出文型用テンプレート」の紙を使い、教える項目をまず書き込んで、導入を三つくらい考えさせた。その後、口慣らしとして既習の動詞を使った練習を考え、練習させたあと、すんなりと文型練習に入れるように準備させた。文型練習は練習させる文を既習の語彙と組み合わせたものを10個作るようにさせた。その際、一番からだんだん短い文から長い文へ、オーソドックスな文から現実に近い文へ、7～10は特にクラスの実情にあったような面白い文にするように指導した。単に口を動かすだけの練習にならず、意味も考えながら練習できるようにするためである。

その後、その文型を使った自由 QA をいくつか考えさせた。これもできるだけ現実に近く、自由に考えて答えることができるような質問を考えて書くように指導した。

自由 QA が終わってからは更にコミュニケーション的な練習をさせるためにゲーム教材やクラス活動集などで使えるものがあったら、メモしておいて実際の授業の時に使うように指導した。

だいたい「みんなの日本語」では各課にいくつか文型があるので、上記の「新出語彙用テンプレート」と「新出文型用テンプレート」を数枚書くことになる。教える項目がすべて終わったところで、「練習 B・C 用テンプレート」を使い、そこで出て来る新出語などの説明を書かせて準備させた。一つの課あたり、合計 10 枚前後の教案ができることになる。これを B5 サイズのバインダーを用意し、書いていった教案を綴じていくようにした。将来もし授業を行って書き換える必要が起こった場合そのページだけを差し替えることができるようにという配慮からである。

研修での問題点

語学力の問題

今回の研修生は日本語能力試験 N2 合格者であったが、日本人教師を対象に書かれた解説書や指導書などを読んでいくにはまだ不十分であるように感じた。教師がやさしい言葉で言い換えて解説したり、例をあげて説明するなどのサポートが必要である。研修中は教師がサポートすることも可能だが、将来自立して専門書も読み進めていくことを考えると、更に上級レベルの日本語の学習も必要である。外国人日本語教師研修生を受け入れる場合、研修生の語学力がどの程度なのかをしっかりと把握しておく必要がある。今回は当校の日本語科卒業生であるので、日本語科から事前に情報を得ていたが外部から受け入れる場合には日本語能力試験の合格証のコピーを提出してもらうべきだろう。

媒介語が使えるという甘え

日本人研修生の場合、基本的に媒介語を使わないで授業を行なっていくことを前提に進めていくが、外国人研修生の場合、自国へ帰ってからは実際の授業で媒介語も使えるということで、甘えが出やすい

ように感じた。日本人研修生でも英語が堪能で、英語圏の国へ行行って授業をするから大丈夫だと甘く考えるケースがあるが、学習者が理解しやすいようなポイントを押さえた例文をいくつか用意しておくことは媒介語が使える、使えないにかかわらず、テクニックとして必要だと筆者は考えている。実際に経験を積んでいけば自明のことだが、研修中では面倒くさがってなかなか考えようとしなないこともある。

実践なしには理論的な説明は無駄になる

今回の研修では授業のテクニックだけでなく、そのテクニックの裏付けとなる理論的なこともやっていきたいと思い、月曜日に「初級を教える」日本語教授法シリーズ 9 国際交流基金編を使った。テキストに出て来ること以外にも関連することや筆者が研究してきたことも紹介したが、模擬授業の後に行った「振り返り」の中で、これは月曜日の授業で説明したことだと言ってもすっかり忘れていた、あるいは理解が出来ていなかったということがあった。長期研修の場合、時間をかけてゆっくり基礎的なことも勉強することができると思うが、短期研修の場合なかなかそうもいかない。しかし教授法に関する事などやらないわけにもいかない。問題は理論と実践が頭の中で繋がっていないことである。短期研修で時間も取れない場合はまずは実践してみて、そこから理論的な解説を交えた授業をするべきだったのかと反省した。

教案のサンプルはどれくらい与えるべきか

今回、外国人研修を受け入れるのが初めてで試行錯誤の連続であった。当初、まずは教案をとにかく書いてもらい、修正を重ね模擬授業を行なうという形式で進めていた。しかし、「教え方の手引き（スリーエーネットワーク）」だけでは具体的な導入例も少なく、模擬授業をするための準備の時間が足りなかったり、教案がしっかりできていないということがよくあった。「振り返り」の際に筆者の教案をコピーして渡したりもしていたが、最後に教案がもらえるからと、あまり熱心に準備してこないようにも感じた。また今回の外国人研修生は7月の日本語能力試験 N1 も受ける予定だったので、午後から日本語能力試験の勉強もしたいとのことで教案作成にも試験が近づくとも身が入らないようでもあった。これは今回に限ったケースだとは思いますが、そんなこともあり、予め筆者の教案をコピーして渡し、よく読み込んで模擬授業をするようにも試験的にやってみた。しかし、結果はひどいものであった。なぜなら教案に書かれていることだけでは、その行間に書かれていない説明や手順などがまったくなく、ただ教案を棒読みするだけになってしまった。やはり自分で考え、自分で準備しなければ意味がないと痛感させられた。教案というのは教師が授業を行なっていく上での台本でもあると改めて感じた。その後、「みんなの日本語」のシリーズではないが、「新日本語の基礎」の具体的な教案例である「日本語の教え方の秘訣 上・下」スリーエーネットワークを渡し、自分が教案を書く際のヒントにするように指導した。

筆者の経験からも教案を書く際に欲しいのは具体的なサンプルだと思う。筆者が日本語教育を始めたころには「日本語の教え方の秘訣 上・下」もなく、教案のサンプルのようなものはなく、授業の流れや導入や練習もすべて自分で考えなければならなかった。経験の長い教師が通ってきた道だと思う。一つの項目に対し、国語辞典、文法の参考書、用例辞典などをいくつも調べ、そこから自分の授業を組み立てていた。これにはかなり時間を取られるばかりでなく、自分のやっていることが正しいのかどうかという思いが付きまとう。数年、日本語教師の研修を担当してみて感じているが、若い世代の方は完全なマニュアルのようなものがあり、その通りやれば授業ができると想像している人が多いように感じる。

しかし、導入を例にすると、いかに早く理解させ、練習へ繋げていくか、それぞれが工夫していかなければならない部分だと思うが、それらのサンプルがたくさんあるとは言えない。最近は便利になりインターネット上に教案例を公開されている方もいるが、数としては少ない。長期に時間も取れてじっくりと考える時間もあるのであれば別だが、短期で研修を行う場合、どのように指導していくか今後の課題であると思う。

実習はどうすべきか

日本人研修生なら日本語科に頼んで、本当の日本語クラスで実習してもらうが、外国人日本語教師の場合、どうすべきなのだろうか。今回は期間も短く、自分たちが学んできたところでもあるので、カンボジア人研修生には見学も実習も行わなかった。しかし、研修生同士の模擬授業では、どうしてもオーセンティックなものではないという思いがあるのだろうか、実際の日本語クラスで実習もしたかったようである。しかし、筆者の勤める学校の日本語科は韓国人や台湾人と漢字圏の学生も多く、また南米の日系人も多いので、どんな反応が来るのか予想できない部分もあり今回は行わなかった。また研修生を受け入れてくれるクラスの方の負担も考えると簡単には依頼できない面もある。いくつかの新出語彙の導入と文法項目を一つだけ担当させるなどして、クラスの負担にならない程度で実習してもらうことも効果的な教育実習になるのではないかと思われるが、これも今後の課題である。

研修後のアンケートから

研修最後の日に簡単なアンケートをしてみたが、研修期間については「短かったと思う」という意見で、内容については「とてもよかった」と満足はしてくれているようだった。勉強になったことという質問では「最初にやるべきことと授業の流れがわかるようになった」また「今までぼんやりとした言葉の違いが区別できるようになった」という外国人日本語教師研修生ならではの答えもあった。プログラムの改善については「実際に日本語の学習者に挑戦してみる機会があった方がいいです」とか「日本語科の見学もあった方がいいです」という意見もあり、研修生同士でやる模擬授業ばかりでなく、本当の日本語学習者相手にも授業を行なってみたかったようである。実際の日本語科のクラスで実習を行えば予想のつかない質問が来たりもするが、本当に授業を行なう貴重な経験ができるので、今後は日本語科のクラスの方と相談して可能な範囲で行っていきたい。

まとめ

今回の研修を通して、外国人日本語教師の研修における課題もいくつか見えた。全体を通して振り返ってみると、とにかく“授業の流れ”“教案の書き方”だけでも身につけてもらいたいとやっていたように思う。研修後のアンケートでも「授業の流れがわかるようになった」という答えがあったので、最低限のことはできたのかと思う。ヴィゴツキー〔Vygotsky,L.S.1978〕による発達の最近接領域〔Zone of Proximal Development〕の理論では学習者個人の問題解決能力は大人である教師や一定のエキスパートなどの指導下ばかりでなく、より能力の高い仲間がいる場合に高められ、より高次の発達水準へ導かれ、引き上げられるとされているが、カンボジア人研修生二人だけでなく、日本語母語話者である日本人研修生も受け入れたことはその点でもよかったと思っている。模擬授業後の「振り返り」では絵カードの

見せ方、導入がわかりにくかったなど本人が意識していなかったことに気付くことが何度もあった。日本語の授業だけでなく教師研修の面でも社会的構成主義の学習理論は有効であると再確認した。今回は初めての受け入れで試行錯誤の繰り返しで研修後の評価も行わなかったが、研修の成果をどのように評価していくかという問題もあるように感じた。この分野では国際交流基金が古くから外国人日本語教師の研修生を受け入れ、その実践からの研究も進んでいることを研修終了後に知った。もっと早くに先行研究を調べておくべきだったと後悔している。今回筆者一人が担当し研修を受け持ったが、今後はポートフォリオ評価を導入したり、できれば複数の教員が担当し、知恵を出し合ったりしながらプログラムを改善していけるようにしたい。

参考文献

- ・「外国人日本語教師教育へのポートフォリオ評価導入の試み」小玉安恵 木山登茂子 有馬淳一
国際交流基金 日本語教育紀要 3号
- ・「外国人日本語教師研修における文法授業のあり方」木田真理
国際交流基金 日本語国際センター紀要 14号
- ・「外国人日本語教師を対象とした日本語教授法カリキュラム」来嶋洋美 木田真理
国際交流基金日本語国際センター紀要 13号
- ・「初級を教える」国際交流基金 日本語教授法シリーズ9
- ・「思考と言語」ヴィゴツキー著 柴田義松訳